（別紙2）

審査の結果の要旨

氏名　安江（小出）いずみ

本論文は、1930 年代から 70 年代までの日米交流史における「外国研究」、すなわち双方がいかに相手国の社会と文化を研究し理解しようとしたかを、ライブラリーを通して明らかにしたものである。そのために、両国を活動の場とした福田なをみ（1907-2007）というライブラリアンに注目する。著者は「図書館」と「司書」の語を用いず、「ライブラリー」と「ライブラリアン」と呼ぶことで、ある意図のもとに集積された書物・出版物とそこからの情報発信・研究支援を柔軟に捉え、広く「情報資源」とみなし、図書館＝施設にとらわれがちな従来の図書館史研究に再考を迫った。

図書館史において福田なをみの名は知られてはいたが、本格的な評伝はなく、また事実誤認も多かった。そこで、福田に関する文献、本人及び関係者へのインタビュー、既存のオーラルヒストリーなどによる徹底的な調査を行い、本論文の基盤とした。米国議会図書館、東京帝国大学図書館、立教大学図書館、外務省調査局、GHQ 参謀第 2 部、国立国会図書館、国際文化会館図書室、メリーランド大学東アジア図書館、ミシガン大学アジア図書館などを職場とした福田の足跡をたどり、それぞれの活動の分析を通して、戦争を挟んで、交流から敵対へ、そして再び交流へと劇的に変化した日米両国の相互研究と理解の諸相を浮き彫りにすることに成功している。書物の集積とその効能と活用に注目し、そこから歴史と社会を検証するという点で、極めて文化資源学にふさわしい有意義な研究である。

本論文は時系列に戦前・戦時期・占領期・戦後の日米関係をカバーする。1930 年代にロバート・ライシャワーの日本研究の助手を務めたことからスタートした福田は、蔵書構築に止まらず、情報提供と研究支援をライブラリアンの職務の柱に一貫して位置付けた。次第にキャリアを積んだ福田は、とりわけ占領期に日米間の重要な橋渡し役を果たし、国立国会図書館と国際文化会館図書室の建設に貢献した。それぞれの時期に、日米双方で求められたライブラリーのあり方や情報資源の性格を精緻に分析している。GHQ の軍政用ライブラリーと将兵用ライブラリーの比較研究などは、軍事史学及び占領史研究にも貢献する可能性を有し、また国際文化会館を戦後建築の重要な成果と位置付けてきた建築史学への寄与も大いに期待できる。

福田なをみ論なのか、それとも日米交流史研究なのか、あくまでもライブラリーに即した検証とはいえ、福田の関与が浅ければその時期の「外国研究」の分析が深まらず、全体像はなかなか結ばれない。そのぶん論の統一を弱めている点は否めない。タイトルにうたう「外国研究」が何を意味したのかについて議論が十分に尽くされたとはいえないが、もたらされた成果の大きさと比較すれば大きな瑕疵とは言い難い。以上をふまえ、本審査委員会は本論文を、博士（文学）の学位を授与するにふさわしい論文であると認定する。